

行方地方南部の地理学的考察

小林 総子

行方地方は茨城県南部、霞ヶ浦と北浦にはさまれた細長く伸びる半島状の地域である。この行方地方の地域性の把握が当論文の目的であるが、地域が広範にわたるのをさけて、行方地方南部のみをとりあつかった。

当地域は東京から80Km範囲内にあるが、都市的要素が皆無の純農村地域であり、現在の拡大する都市化からは取り残された地域であるといえる。この地域性は集落を指標として調査することにより、より深く追求出来るものと考え、第三章 集落、第四章 後進性についての考察という内容構成を試みた。そして、この集落後進性の前提となる自然条件として第二章で地形を論じた。

第二章の地形では、地形分類と、湖底地域についての若干の考察を試みたが、ここで問題となったのは、行方台地の台地面が切崖面図と表層物質から考えて、一面であるとは考え難いことであったが、その結論は調査不足と当論文に於ける意味がさほど大きくない事等のため、不完全のままで終らせた。

第三章集落では、台地及び湖岸、又それらの間一帯に散在する集落が、その立地、発生、機能、形態等に於いて相互関係がみられた結果、この地方の集落をいくつかのタイプに分類し、それらのタイプの差によってこの地方の経済の中心である農業、及び漁業が如何に異った内容を持つかを、少し詳細に記述した。第四章では結論として農業面からみた後進性、又その問題の所在をあきらかにしたつもりである。

結論的に言えば、この地域に於て農業経営上、好条件を有すると思われ、又事実、畑作農家として最も安定した経営を営む越中農民の集落でさえも、土地利用及び経営上の問題等から考えて、都心より80Km圏内にある地域としては相対的後進性を示している。商業作物としてこの地域で最も有利でかつ広く行われているのが、たばこ作であることは、現在、他地域ではたばこが労働力の問題から衰退しつつある作物である事等を考えあわせれば、それはこの地域の一面を表わしている。

この後進性は、この地域が半島状の孤立的な位置を占めている事、又台地の開発が新しく、江戸時代末期であり、しかもそれが走百姓としての越中農民によって開発された点、又、いわゆる後進地域といわれる東関東の一部に入り、背後又は近隣に恩恵を浴すべき経済上重要な地域がない等の種々の問題から由来しているものと考えられる。それらの問題を解決すべきものとして鹿島の工業開発より拡大する都市化等が考えられるが、それらは今後の問題である。